ティーチング・ポートフォリオ

菱田 信彦

（記入日： 2019 年 9 月 23 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「基礎ゼミナール」（1 年前期必修科目 2 単位）、「コミュニケーション基礎演習」（2 年前期必修科目 1 単位）、「イギリス文化史(1)(2)」（1～2 年前・後期選択必修科目、各 2 単位）、「国際文化演習(4)」（2 年後期選択必修科目 2 単位）、（「リサーチ&プレゼンテーション」（3～4 年通年選択必修科目 2 単位）、「セミナー」（3 年通年必修科目 4 単位）、「国際コミュニケーション（イギリス研修）」（1～4 年共通教育選択科目 2 単位、集中授業）、「イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(1)」（大学院 1 年前期選択必修科目 2 単位）、「比較文化論特論」（大学院 1 年前期選択必修科目 2 単位）など。

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「基礎ゼミナール」と「国際コミュニケーション」では、資料の収集や分析、プレゼンテーションなど大学での研究活動の基礎を身につけさせるとともに、自分の立場を明確にした上で意見を述べ、他の意見に対して質問やコメントを行う、ということを体験させるよう努めた。またプレゼンテーションを「評価シート」により相互評価させることで、効果的なプレゼンテーションとは何かということへの意識を高めた。「イギリス文化史(1)(2)」ではイギリスと非ヨーロッパ地域との関係に注目させ、イギリスが非ヨーロッパ地域を植民化する過程でいかに異文化を取り込みつつ自己形成したかを理解させた。ヨーロッパ文化を扱った「国際文化演習(4)」では、キリスト教やローマ帝国などの「大文字の物語」がいかにヨーロッパのアイデンティティを形成してきたかを理解させた上で、学生にテーマを設定してリサーチとプレゼンテーションを行うグループワークを実施させ、「評価シート」で相互評価させた。「リサーチ＆プレゼンテーション」では、英語でリサーチとプレゼンテーションを行う際の基礎を身につけさせるとともに、問題について賛否や優劣の判断を明確に示そうとする英語圏の人々の価値観を意識させ、それをふまえた上で話し合いながら自分

たちのプレゼンテーションを作成するグループワークを行っている。「セミナー」ではイギリスの児童文学作品に関する英語論文の一部を講読させ、作品の書かれた時代の社会背景がいかに作品に影響しているかをディスカッションしている。学生がイギリスのオックスフォードで 3 週間の語学研修を行う「国際コミュニケーション（イギリス研修）」では、イギリス人の文化や価値観が日本人とどのように異なるかを意識させた上で、オックスフォードに関するリサーチとプレゼンテーションをさせた。帰国後には日本人と他国人との文化的違いなどをテーマに英語でスピーチを行わせる。

大学院の「イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(1)」では、イギリス人の生活習慣、コミュニケーションのしかた、他者との距離のとり方などが日本人とどう違うかについて、英語文献を講読しつつディスカッションした。「比較文化論特論」では、国際的なファッション雑誌の広告表現について比較文化的視点から論じた英語論文を講読し、社会学分野の論文の構成や、統計処理の基礎などについて学んだ。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

リサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げたと考えている。とくに「コミュニケーション基礎演習」の評価シートでは、学生が他のメンバーのプレゼンテーションを意識的に聞き、身振りやアイコンタクトなどのデリバリースキル、またプレゼンテーションの論理構成や説得力について客観的に評価していることがうかがえた（エビデンス 1）。また「国際文化演習(4)」の評価シートでは、学生が移民問題や文化摩擦などヨーロッパ社会のさまざまな問題に関心を持ちつつ、自分なりの問題意識を形成しようとしている様子が見てとれた（エビデンス 2）。その一方、時間的制約もあって教員がテーマを提示して課題にとり組ませることが主だったため、学生が自分の関心にもとづき主体的に問題を発見してテーマ化する活動にまで至れていないという思いが残る。グループワークの運営なども学生中心で行わせたかった。

大学院の授業については、担当する院生がまだ修士論文の中間発表に至っておらず、授業内容が本人の研究にどの程度反映されているかをはかることが難しいため、評価を差し控える。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生の問題意識と主体性をより高める活動が必要になる。「国際文化演習(4)」のようなアクティブな学びを中心とする科目では、教員の働きかけは環境づくりにとどめ、テーマの設定やグループワークの進行を学生自身で運営するような形が望ましい。また教材についても、これまではプリントやパワーポイント

資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1「コミュニケーション基礎演習」評価シート（非公開）

2「国際文化演習(4)」評価シート（非公開）

英語 I、英語 II、国際文化特講 I におけるティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科　小泉朝子

(記入日：2019 年 9 月 24 日)

１．教育の責任

担当科目（平成 30 年度）: 英語 I(1)(2)（1 年前期後期必修科目、各 1 単位）、英語 II(1)(2)(2 年前期後期必修科目、各 1 単位)、英検特別講座(前期外国語選択科目、1 単位)、資格英語 II(前期選択科目、1 単位)、リーディング III(3 年通年専門選択必修科目、2 単位)、ライティング III(3 年通年専門選択必修科目、2 単位)、国際文化特講 I(3 年前期専門選択必修科目、2 単位)、インターナショナル・プログラム(1)（後期専門選択必修科目、2 単位）、卒業研究(4 年通年専門必修科目、6 単位)、ニュージーランド研修(前期後期選択科目、各 2 単位)

ここでは、私が昨年度担当した科目のうち、次に述べる 3 科目について説明する。共通教育科目の英語 I（D クラス）、英語 II（A クラス）、専門科目の国際文化特講 I(イギリスの文化)である。英語 I は本学全 8 学科のうち 6 学科（史学科、心理学科、日本文化学科、幼児教育学科、児童教育学科、生活文化学科）の 1 年生の必修科目であり、単位の取得が卒業要件である。英語 II は前述の 6 学科の 2 年生の必修科目であり、英語 I と同様に単位取得が卒業要件となっている。したがって、大学学部レベルの総合的な英語学修が求められる。また、国際文化特講 I(イギリスと文化)は国際英語学科の 3 年生を対象とした専門選択必修科目であり、イギリスおよびイギリス文化について学部レベルの知識、分析力が必要とされる。

２．理念

英語 I の到達目標は、「英語におけるコミュニケーション能力を向上させることができる」である。私の英語 I における教育理念は、高校で学んだ英語よりも高度な、相手の心情に配慮できる英語を教える点にある。したがって、授業では配慮する英語または英語の敬語表現に常に留意して、ペアワークを通じて相手に配慮できる英語表現の定着に努めている。文法上の間違いはないがコミュニケーションの相手が不快に感じるような表現を避けること、より良いコミュニケーションのために必要な、相手への理解力を培うために、英語・文化・歴史・ジェンダー等に配慮できる指導案作りを重要視している。

英語 II の到達目標は、「まとまった英文を読み、内容を理解し、要約できる」である。最上位クラスを担当した昨年度の英語 II における教育理念は、英語 I の理念と通底しつつ、さらに学部レベルの高度な英文を理解し、その英文の背景および文化を理解させる点にある。真に高度な英文を理解させるために、文法事項や語彙、および段落構成法に至るまで、板書やプリントを使用して丁寧な説明を心掛けた。

国際文化特講 I の到達目標は、「イギリス文学および文化について、論理的に説明できる」

である。国際英語学科 3 年以上の学生の選択必修科目として、この科目で私が教育理念としているのは、イギリスの文化と歴史が世界の歴史においてどのような位置づけにあるかを理解させる点である。産業革命や三角貿易、植民地と帝国主義等、イギリスと世界の歴史の流れを包括的に理解させるために、様々な媒体を積極的に活用した。

３．方法

英語 I、英語 II、国際文化特講 I の三科目に共通して実践しているのは、学生の回答や質問、疑問に丁寧に答え、フィードバックを行う点である。授業中に適宜、学生の理解の度合いを確認し、彼女たちの足並みをそろえるよう心掛けた。また、時間が許す限り、文法事項や文化的背景について、丁寧な板書やプリントを活用して学生の理解を補強した。同時に、教室内をこまめに回ることで学生からの疑問に答え、授業内容をフォローできるように常時支援した。

その他、英語 I では、高校での英語教育で陥りがちな(マナー上は)誤った英語表現や、使い分けることの難しい使役動詞のニュアンスの違い、動詞の時制の違いが指し示す意味についても、例文やエピソードを挙げつつ板書で丁寧に説明した。ペアワーク時には、言葉以外のコミュニケーション（体の向きやアイコンタクト、ジェスチャー等）の重要性を常に指導した。

英語 II では、難易度の高い文法事項やレトリックを丁寧に説明し、さらにパラフレーズ(単語の言い換え表現)への気づきを学生に促した。段落構成については、主要の５パターン（プロセス、分類、原因/結果、比較対象、問題解決）の構成方法に言及しつつ、板書およびプリントを通じて丁寧に説明した。

国際文化特講 I では、イギリスの１８，１９世紀の歴史、文化についてプリント(年表や統計結果を含む)、画像、映像、インターネットを利用したリサーチワークを積極的に活用し、学生の理解を促した。リサーチワークの結果は授業時間内に各自（または各グループ）発表させることで、緊張感を保つことも心掛けた。

４．成果

英語 I においては、授業終了後の学生が、授業中に指導された表現を互いに使い（冗談めかしてではあるが）、英語で相手とコミュニケーションを取っている様子が随時見受けられた。英検の二次試験へのモチベーションを向上させる学生が多かったことも、記憶される。（エビデンス③）

英語 II においては、テキストの難易度の高さに不満を漏らす学生がいる一方で、英語圏での文章読解の本来のレベルを確認できて良かった、との感想を伝えてくれた学生も一定数、存在した。英語での語学研修を考えている学生がいたため、そうした学生にとっては意義を感じてもらえた点は良かったのではないかと考える。(エビデンス③④)

国際文化特講 I においては、「紅茶」という飲み物が１８，１９世紀のイギリスの歴史、

文化においてどのような位置づけにあるのか、説明やプリントを通じて、学生がしっかりと理解してくれた点が最大の成果と言える。インターネットを利用した情報収集においては、ショッピング情報に惑わされることなく、必要な情報や資料にどのようにアクセスするかを授業中に実践し、正しいサイトに辿り着く練習ができたので良かった、という感想も多く得た。(エビデンス①②③④)

５．今後の目標

英語 I および英語 II では、年度によって学生の習熟度が変わるため、授業中に教えられる文法事項・表現・語彙のレベルは、年度ごとに変える必要が生じるが、引き続き、学生の理解を最優先にしつつも、彼女たちの知識欲を刺激し、コミュニケーション能力や文章理解力を向上させるための授業づくりを工夫していきたい。学生の興味や関心事に寄り添いつつ、英語の学修に結び付くトピックを抽出して、授業の充実を図りたい。

国際文化特講 I では、イギリスの歴史・文化を教える際に、昨年度よりも工夫を凝らしたいと考える。キーワードやカテゴリーごとに各事象を総合的にまとめ、学生の記憶に残りやすい授業構成を考えていくつもりである。また、画像、映像等を用いた説明については、よりよい素材を求めて今後も引き続き調査していく所存である。

６．エビデンスとなるもの

①リアクション・ペーパー（非公開）
②リサーチ・ペーパー（非公開）
③授業の感想（非公開）
④配布プリント

ティーチング・ポートフォリオ

倉林　直子

（記入日：2019 年　9 月 20 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

アメリカ文化史(1)(2)（1 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化演習(2)（2 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化特講 II（3 年次以上：選択必修 2 単位）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

アメリカという他国に関する知識をさまざまな角度から伝えることによって、学生の目を世界に向けさせるとともに、教養を深め、異文化理解の楽しさや難しさを認識させることを目標としている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

すべてのクラスでパワーポイントを使い、学生の視覚に訴えることで、授業に飽きさせない工夫をしている。

アメリカの歴史を文化、社会を中心に建国期からたどるアメリカ文化史(1)(2)では、写真を見せたり、映像を使ったりして、学生に興味を持ってもらうよう工夫をしている。さらに、毎回アメリカに関する新聞記事を読ませたり、ニュースを紹介したりすることで、歴史をたどることは現在の理解につながることを伝えるとともに、時事問題に興味を持つよう促している。試験やレポートなどの評価にはルーブリックを使用し、基準を明確化していることに加え、学生がどのような点に留意すればよいかを理解し、それを次の課題に反映できるよう、フィードバックをきちんと行っている。

国際文化演習(2)では、大統領の英文スピーチを毎回訳させて英語力の向上を図るとともに、その社会背景を写真や動画を使って説明している。予習をした訳を各自発表させるという点では、学生が主体的に関わっている授業であるといえる。また、実際に大統領がスピーチしている映像を見せて、心に残るスピーチはどのようなものかを学生に考えさせたりしている。

国際文化特講 II では、アメリカ社会を構成する人々が現在どのような状況に置かれ、「主流の」アメリカ文化でどのように表象されているかを示すために映画を多用している。各回で取り上げた人種が持つ歴史的背景も詳しく説明し、どのような背景のもとに描写が行われているのかも説明する。また、扱う内容が現在のニュース等と関連付けられる場合は，できるだけ言及し、学生が自時

事問題に興味を持つよう促している。さらに、本授業では、学生に考えさせ、学生同士で話し合い、発表させることに重点を置いている。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

アメリカ文化史(1)[2019 年度前期]では、中間試験と期末試験（両方とも論述）を比べた際、期末試験の質が良い学生が多かった。これは、中間試験を返却した時のフィードバックによる効果だと考えられる（エビデンス１）。

国際文化特講 II[2018 年度後期]を履修した学生に対し、教員が独自に実施したアンケートの結果から、視聴覚教材が有効活用されていたと学生が感じていたことがわかった。さらに、各授業でのディスカッションを通して、自分とは異なる多様な意見、見方があることを認識できた学生が多かったという結果も得ることができた（エビデンス２）。

５　今後の目標（これからどうするか）

国際文化演習や国際文化特講では、インタラクティブな授業ができたと思われるが、1 年次から履修できるアメリカ文化史は、広い教養を身に着けることを目的とするため、どうしても受け身の授業になりがちである。リアクションペーパーなどを活用し、学生がより主体的に授業に参加できるよう促したい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス１：中間試験と期末試験結果（非公開）

エビデンス２：学生アンケート

倉林直子「新学習指導要領ならびに教員養成課程コアカリキュラムに基づいた授業運営―国際文化特講 II を一例として」『川村英文学』（2019.3）

エビデンス３：授業内で配布するレジュメ（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

松本　修

（記入日：2019 年　9 月　21 日）

1　教育の責任

言語学演習(2)(2 年前期選択必修科目 2 単位)、英文法Ⅰ(1 年通年必修科目 2 単位)、ライティングⅠ（1 年通年必修科目 2 単位）、児童英語教育法（2 年以上選択科目 2 単位）、英語Ⅰ（1)(1 年前期必修科目 2 単位）、英語Ⅱ（1)(2 年前期必修科目 2 単位）など。

2　理念

私の教育理念は、学生の持っている多様な学問への関心に応え、知識を広げること、さらに、全体を見渡す視点から物事を捉え、批判的に吟味する能力を養うことである。また、学生間の協働作業を授業に積極的に取り入れ、能動的に学ぶことのできる場を提供し、自律した学習者を育てることを目標とし授業に取り組んでいる。

3　方法

言語学演習(2)では、他人との学び合いを通して自律した学習者を育成する「相互教授法(Reciprocal Teaching)」を積極的に導入した。そのため、学習の進んでいる学生には、周囲の者の学習支援を行うように指示した。また、英文法Ⅰ、ライティングⅠでは、学習ポートフォリオを活用し、自己の学習を記録、管理、モニタリングさせることにより、学生のメタ認知機能を発達させようと試みた。

4　成果

言語学演習(2)においては、英語の文構造を句構造規則に基づいて分析・コンピューティングするレポートを課したが、当初は学生間の理解度に大きな開きがあった(エビデンス 1)。授業でレポートを返却し、問題を１つ１つ丁寧に見直していった。その際、教師からの一方的・直接的な介入よりも、相互教授法により、学生間で協働して問題を解決することを優先した。その結果、授業は能動的な学びの場となり、さらに、個々の知識や技術が向上した（エビデンス 2)。英文法ⅠやライティングⅠでは、補助資料やレポート課題、小テストの答案およびスコアレコード、授業ノートなどの学習の成果物をポートフォリオとして自己管理させることができた（エビデンス 3)。

5　今後の目標

今後も授業では協同的、能動的な学習の場を積極的に提供し、自律した学生を育成していきたい。また、学生の学びの質の向上に寄与するとともに，自らの授業実践者としての力量を継続的に高めていきたいと考えている。

6　エビデンスとなるもの

1. レポート課題 1:言語学演習（2)（非公開）
2. リアクションペーパー（非公開）

3. 学習ポートフォリオ（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

Shabalin Maxim

（記入日：　2019 年　9 月　30 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本の政治と国際社会（1-4 年前後期選択必修科目、2 単位）、海外から見た日本（2-4 年前後期選択必修科目、2 単位）、EIAII (2-4 年前後期必修科目、1 単位)、EIAIII　（3-4 年前後期必修科目、1 単位）、国際文化演習３（2-4 年後期選択必修科目、2 単位）、IELTS と英検の筆記と二次試験対策講座（1-4 年、参加自由、単位なし）、英会話（1-4 年、参加自由、単位なし）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

日本や他の国々の社会や文化の現象を人類が辿ってきた歴史の中に位置づけながら、それについて学生達が制度的かつクリティカルシンキング的に思考する力を身に付けることを目指す。

英語で日常的な会話から抽象的で理論的思考が出来るように授業を進める。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義を含めての授業を学生とのダイアログの場として見る。学生達に授業のテーマの鍵となる問題を提起し、各自の経験や知識の自覚を促し、新しい知識や考え方に好奇心を掻き立て学ぶ。例えば、日本の社会福祉政策をテーマにした授業では、国々が運営する福祉制度がなぜ、そしてどのように当たり前のものになったのか、年金や誰でも享受出来る先進医療を当たり前のようなものとして継続すべきか、そしてその制度の中心に個人、家族、社会、それとも国家が立つべきかについて議論し、適切な国際例や十九世紀と二十世紀の歴史を挙げながら、日本の福祉政策の変遷の日本の特徴と他の国々との共通点について学ぶ。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

各テーマのキーワードの学習や復習を促すために単語のクイズを導入した（エビデンス１）。英語力のレベルの差が大きい時には、努力と英語力の伸び率を、どのように評価の根拠にするかが課題として残っている。

留学に必要な IELTS 資格のための対策講座に参加した学生全員が合格した（エ

ビデンス２)。

５　今後の目標（これからどうするか）
今後は政治の授業の事前学習と復習に日本語で読めるテキストを導入する。重要な専門用語の学習を補助するための単語リストを作る。ラーニングコモンズの充実のため、学生研究室で自主学習に役立つ本を揃え、それらの活用の機会を増やす（エビデンス３)。
日本語でも記入可のリアクションペーパーの導入を検討する。
学生研究室に英検やIELTSの筆記と二次試験対策に必要な教材が不足しているため、講座に役立つ教材を新規に購入する。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
１．単語のクイズ　（非公開）
２．IELTS スコアレポート（非公開）
３．購入済みの教材：
—日本の政治や外交史の教材（日本語と英語版）- １５冊程度。
—英検と IELTS の教材 - １５冊程度。

ティーチング・ポートフォリオ

（記入日：　2019 年　1 月　28 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本の政治と国際社会（1-4 年前後期選択必修科目、2 単位）、海外から見た日本（2-4 年前後期選択必修科目、2 単位）、EIAII（2-4 年前後期必修科目、1 単位）、EIAIII　（3-4 年前後期必修科目、1 単位）、国際文化演習３（2-4 年後期選択必修科目、2 単位）、IELTS と英検の筆記と二次試験対策講座（1-4 年、参加自由、単位なし）、英会話（1-4 年、参加自由、単位なし）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

日本や他の国々の社会や文化の現象を人類が辿ってきた歴史の中に位置づけながら、それについて学生達が体系的かつクリティカルに思考する力を身に付けることを目指す。

英語で日常的な会話から抽象的で理論的思考が出来るように授業を進める。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義を含めての授業を学生とのダイアログの場として見る。学生達に授業のテーマの鍵となる問題を提起し、各自の経験や知識の自覚を促し、新しい知識や考え方に好奇心を掻き立て学ぶ。例えば、国際文化演習の授業では、「ナショナルホリデーとは何か」、から始める。各自が意見を述べながら、日本や国際文化の知識を深め、体系化する。その後、グループワークで現在の社会に必要で、かつ受け入れられそうな新たなホリデーを、同時に作ったアルゴリズムに沿ってデザインする。その後、出来上がった新たなホリデーについてクラス全員で議論する。さらに、オーストラリアで実際に新しく作られた祝日について、同じアルゴリズムに従って研究する。自分のグループがデザインしたホリデーの再評価を含め、祝日・文化・社会の繋がりについて最終的なディスカッションを行う。

　このコースでは、上記のようなパターンで学生達のグループワークの実践と個人の理論思考を組み合わせたアクティブラーニングを実施する（エビデンス①）。

４　成果（どうだったか結果と評価）

- ✓ 学生達が上記のような指導方法に慣れていなかったようで、学生全員が初回から授業に円滑についていけたとは言えない（エビデンス②）。そのため、成績が振るわない学生もみられた。単位をもらわなかった学生がいた。一方、「AA」と「A」という良い成績を獲得した学生もいた（エビデンス③）。初回のガイダンスを徹底して行う必要があると感じた。授業登録期間中に初回の授業に参加できなかった学生には必要な情報を取得できるようにする。
- ✓ 今年度の授業の様子と学生の成績を分析し、政治の授業をより効果的に進めることが出来るように、次年度のシラバスの事前学修と事後学修の欄に日本語で読めるテキストを導入した（エビデンス④）。
- ✓ EIAIII では、実験的に、数字やダイアグラムのみで表されているデータや研究結果をナラティブ化する授業を実践した。学生のほとんどがグラフィック情報を言語化することが苦手であることが分かった（エビデンス⑤）。このため、データサイエンスの教育の一環として、同様な授業内容を来年度のシラバスに盛り込んだ（エビデンス⑥）。この取り組みが学生のスピーキング能力の向上にどれほどつながるか見極める。

５　今後の目標（これからどうするか）

- ➢ 英語の能力のレベルの差が大きい時には、努力と英語の能力の伸び率を、どのように評価の根拠にするかが以前から課題であった。一律的な基準が望ましく、今年度に実験的に実施した評価の仕方を来年度からすべての授業に導入する。授業で扱われたテーマについて英語で実際に説明出来るかということを合格の基準とする。授業参加者全員が少なくとも最低基準の英語で話す・書く力が身に付くように支援する。勉強の仕方のガイダンスも徹底して行う。
- ➢ アクティブラーニングの概念を軸にした EIAII と EIAIII の授業の実現のために新しい教科書 Impact（CEFR レベル A2 と B1）を採用した。ガイダンスを徹底して行い、学生達の話す力がどれほど増えるかを授業の成果として見極めていく。
- ➢ EIA に加え、他の授業でも、学生たちのコラボレーションを中心に置いている。これは将来の授業の「ムードル化」を見据えているためである。ムードルは世界標準の授業支援システムであり、すでに日本の多くの大学が既に導入している。世界の教育の「ムードル化」は逆らえられない流れであり、川村学園女子大学も、将来ムードル又はそれと同様なシステムを活用したラーニングマネジメントシステムの導入を検討する必要性があると考える。このシステムの導入により、教員と学生の双方が大きな利益を得ることが予想される（エビデンス⑦）。

- 今までの英会話の講座の成果を分析した結果、いくつかの非効率的な箇所がみつかった。より多くの学生が英会話の講座に参加するために、講座の運営方法を見直すべきだった。学生一人一人が自分の話力の成長を実感できるよう、そして、自主学習のモチベーションを維持できるように、世界標準の教材の中から、一番実践的で高い効果が得られるような教材を採用することにした（エビデンス⑧)。この教材を使うことにより、一回 20 分という短時間の自主学習も可能になり、会話講座に参加するきかっけにもなる。自分が話す力が上達していることを実感することと自主勉強の自己管理も簡単にできるようになると期待している。
- ラーニングコモンズの充実のため、学生研究室で自主学習に役立つ本を揃え、それらの活用の機会を増やす。
- 学生研究室に TOEIC の試験対策に必要な教材が極端に不足している。公認過去問題集だけでは多様なレベルの学生のニーズが満たされない。また、数多くの TOEIC 関連の出版物の中でどれを選べばいいか迷う学生も少なからずいるため、勉強のモチベーションの向上も考慮しながら、試験対策講座や自主学習に役立つ教材を厳選し、学科長の承認を得、新規に購入する（エビデンス⑨)。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 2020 年度のシラバス（公開予定)。
2. 授業参加者からのコメント（非公開)。
3. 学生成績表（非公開)。
4. 2020 年度のシラバス（公開予定)。
5. 小テストの結果、プレゼンテーションの評価（非公開)。
6. 2020 年度のシラバス（公開予定)。
7. 参考のため https://www.waseda.jp/navi/wsdmoodle/index.html
8. Gairns, R. and S. Redman. 2008. *Oxford Word Skills: Basic and Intermediate*. Oxford University Press. (“Highly Commended English-Speaking Union's Duke of Edinburgh English Language Book Award 2009”を受賞している教材である。)
9. TOEIC 試験対策教材　－　30 冊程度発注済み。